祓魔師

？マン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
祓魔師

【Ｎコード】
Ｎ３８３５Ｘ

【作者名】
？マン

【あらすじ】
両親を青い夜で失った少年が祓魔師を目指し祓魔塾に入る。原作メンバーも登場する。

決意

「うわーーーー」

「きゃーーー」

少年の目の前では彼の父親と母親が青い炎に包まれていく。
少年はただ見ていることしかできなかった。

「父さんー、母さんー」

少年は目をさまし、またあの夢かと呟いた。
ここ最近さっきのような夢を何回も見るようになった。
ふと少年は机の上に置いてある写真を見る。
写真は笑って赤ん坊を見る男性と女性が写っていた。
少年の名前は天童祐二（てんどうゆうじ）中学一年である。
頭は中ぐらいで運動神経は上の下ぐらいのごく普通少年だ。
ただし一つだけ周りと違うことがある。
それは物心つく前から周りは見ることができない物が見えていること。
しかし、その事を誰にも言わず生活している。
もちろん祖父母にも話していない。
祐二の両親は彼が生まれて数ヵ月後に病気で他界してしまっていた。
それで祐二は祖父母と一緒に暮らしている。
祐二は制服に着替え居間に行った。
できていた朝食を食べ学校に行く。

祐二は都内では有名な私立の北十字学園に通っている。
北十字学園の卒業生はほとんどが正十字学園に入学している進学校である。
かなり金がかかるが祐二の両親は多額の遺産を残していたので困らずにすんだ。

祐二は帰宅して祖父母にあることを聞いた。

「あのさ、父さんと母さんって本当に病気で死んだだよね。」

「そうだよ。まだ若くて本当に悲しかったよ。」

そう祖母は答えた。

「青い炎に包まれて死んだわけじゃないよね。」

祐二がそう言うと祖父が
「祐二、ちょっと来なさい。」

祖母は顔を下に向けて黙っている。

祖父についていくと蔵に来た。
その中に入り奥に進むとタンスのような物があった。
中には剣が入っていた。祖父はそれを祐二に渡した。
「これはうちの家宝の天牙剣だ。今日からこれはお前の物だ。」

祐二は意味が分からなかった。

「どうゆう事？」

「お前の両親は祓魔師だった。そして『青い夜』の犠牲者になってしまった。とにかく続きは家の中で話す。」

とりあえず家に戻ることになった。

「さっきも言ったがお前の両親は祓魔師でこの世界を悪魔から守っていた。」

祖父は躊躇（ためら）ったが

「お前が生まれて数ヵ月後、『青い夜』という出来事が起きた。それはお前の両親を含めた世界中の祓魔師がサタン（魔神の）によって大量虐殺された日のことだ。」

話を聞いている内にある決意をした。

「どうすれば祓魔師になれる。」

「正十字学園に祓魔塾という祓魔師養成所がある。そこで入り悪魔払い（エクソシズム）を学んで試験に合格すればなれる。蔵に色々な資料があるそれを見て勉強するといい。」

「ありがとう」

祐二は急いで蔵に向かい資料を取りに行った。

必ず祓魔師になって『青い夜』みたいな出来事を二度と起こさせ

ない。

そして、人の役に立つ。

祐二はそう決意した。

第1話　正十字学園

祐二は無事中学を卒業し正十字学園の入学が決まった。
合格が決まったその日から祓魔師関係のことを資料で知ったり、剣を使いこなせるように特訓した。
さらに使い魔として狼の銀狼（毛が銀色だから）を召喚できるようになった。

そして、正十字学園に行く日が来た。
祖父母に、いままでありがとうとお礼を言った。
「必ず祓魔師になれよ。」
祖父は快く送り出してくれた。
「じゃあ」

そして車に乗った。

「毎月手紙出すって言っておいて。」

しばらく高速道路を走りトンネルをくぐると正十字学園の全景が見えた。

「天童祐二です。」

受験票を見せて入学手続きを終えると

「では次に理事長室に行ってください。」

そう言われ理事長室に行き、ドアをノックする。

どうぞ、と声がして部屋に入る。

中は洋風な感じでここが日本の学校だと一瞬わからなくなってしまった。

椅子にはピエロの格好をした男が座っていた。

「はじめまして私、ヨハン・ファウスト五世です。ああちなみに今のは表向きの名で本当の名はメフィスト・フェレスといいます。どうぞよろしく。」

「天童祐二です。よろしくお願いいたします。」

メフィストは祐二の顔をじっと見ている。

そして、フフフと小さく笑った。

「では、まず最初にこれを渡しておきます。」　メフィストは鍵を差し出した。

「その鍵はいつ、何処の扉からでも塾に行ける鍵です。大切にしてください。あと寮は本当に旧館でいんですか？」

「はい。旧館でいいです。」

メフィストは珍しそうに祐二を見て、

「分かりました。そうしましょう。ああちなみに塾は入学式の日からですから間違えないようにしてください。」

「はい分かりました。いろいろありがとうございました。」

そう言って理事長室を後にして旧館に行った。

自分の部屋に着くと荷ほどきを始める。

ある程度済ませるとエクソシズムの予習に取り掛かった。

ふと気がつくと机の上に祓魔塾の教材が置いてあった。

パラパラとめくっていくと今まで読んでいた物より難しかったが、

所々理解できる部分があった。

入学式当日になるとたくさんの生徒で学園は溢れていた。

その中に剣の入った袋を背負った生徒がいた。

しかし、すぐに見失った。

また見かけることがあるだろうとホールに行き、入学式に出た。

入学式が終わると職員が学園内を案内するということになった。

中はとても広くゴージャスな雰囲気だった。

ＨＲが終わり放課後になると祐二は鍵を使って塾に行った。

「教室はたしか１１０６号室だったな。」

教室に着くと数人の生徒がいた。

室内なのにフードを被り顔が見えない生徒。パペットを使って何かしている生徒。

しばらくすると女子の二人組、男子の三人組が入ってきた。

なかなか先生が来なかった。

扉が開いた。やっときたかと思ったが違った。

ただ、入学式の前に見たこと、剣を背負った生徒だった。後ろに犬が一匹いた。

名前は奥村燐だという。

そして、やっと先生がきたがなんと新入生代表をした生徒だった。

「雪男！？」

燐は一人声を挙げて立ち上がった。

「はじめまして新任の奥村雪男です。授業は主に対悪魔薬学を教えます。」

なんと7歳の時から祓魔を学び、二年前に祓魔師の称号を取得したらしい。

「この中でまだ魔障にかかったことのない人はいませんか？」

魔障とは悪魔から受けた傷や病のことでかかると悪魔が見えるようになる。

「三人ですね。では最初の授業は魔障の儀式から始めましょう。」

「どういうだ雪男。」

燐の問を無視して話を続けている。

「実はこの教室普段は使われておらず、ゴブリン族という悪魔のすみかになっています。」

「大丈夫なんですか？」

女子生徒の一人が不安そうに聞くが

「大丈夫です。イタズラ程度の魔力しかもっていません。ただし、悪魔は悪魔このような腐った血の匂いが嗅ぐと興奮して凶暴化します。」

その間に燐は先生の近くにいき、

「雪男ちゃんと説明しろ。」

と先生の腕を掴んだ。

「何をです？」

「ふざけるな。」

先生はため息をつくと

「すみませんが奥村君と話があるので部屋の外でお待ちください。」

と生徒に指示した。

みんな文句を言いながら部屋の外に出た。

部屋の外に出てもまだ文句を言っている生徒もいる。

しばらくすると部屋の中から銃声が聞こえ始めた。

悪魔が現れたと思い、懐にある剣に手をかけた。

しかし、悪魔は廊下に出てこず、銃声もなくなった。

またしばらくすると

「皆さんお待たせしました。授業を再開します。」

そう言われ中に入ると机が乱れていて何事もなかったかのように

燐は無傷だった。

（一体何者だ彼ら）

そう思いながら授業を受けた。

寮に戻るとなぜか明かりがついていた。急いで戻ると燐がいた。

「何してるんだお前？」

「おわ、おどかすなよ。俺はただ自分の部屋を探しているだけだ。」

どうやら燐もこの旧館で暮らすようだ。

「天童君？」

振り向くと奥村先生がいた。

「あれ先生なんでこっちにいるんですか？新館の方じゃないんですか？」

「あぁそれはいろいろあって。」

祐二は深く追求しなかった。

別に二人増えても良かったからである。

「よろしく。」

「おうよろしく。」

「こちらこそ。」

そして、各自の部屋に行った。

燐と先生は相部屋らしい。

祐二は部屋に着くと出された課題を早く終わらせようと取り掛か

った。

第2話　天童家

ある休日、燐と雪男はどこかに行ってしまい祐二は旧館に一人でいた。

祐二は仕方がないので部屋で勉強することにした。

部屋で勉強しているとドアをノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

ドアが開くと祓魔塾の先生がいた。

「天童君、フェレス卿が呼んでいる。」

そう言うとさっさと行ってしまった。

とりあえず理事長室に行くとメフィストと知らない男がいた。

「おお、天童君お待ちしていました。」

椅子を勧められ座ると

「でお話しと言うのは？」

「はい、実はまた最近私の屋敷で悪魔が出るようになってしまったのです。そこで天童家の人に祓ってもらいたくて、お願いしにきたわけです。」

「なぜ、天童家の人なのですか？」

確かにそう思った。

「実はうちに現れる悪魔はいつも天童家の人に頼んでいるのです。」

「分かりました、ただし他に数人同行させますがいいですね。なにしろ、彼はまだ訓練生（ペイジ）で本来なら任務は出来ないのですが、今回は特別ということで。」

「ありがとうございます。」

「天童君は構いませんよね。」

「・・・・あっ、はい。」

突然の事で返事が遅れてしまった。

男は、ではよろしくお願いします、と言い部屋を出ていった。

「では天童君、明日行ってください。今日は明日の準備をしていてください。」

「分かりました。」

「明朝６時に寮の外で待ってください。同行する先生が迎えに行きますので。」

まさか訓練生でいきなり実戦任務とは正直信じられなかった。

訓練生の一つ上の候補生(エクスワイア)でも実戦はほとんどない。それなのに訓練生がいきなり実戦とは信じることができない。

寮に戻るととりあえず魔法円の書いてある紙を数枚を準備した。

「んーと他いる物は」

しかし結局、紙数枚しか準備しなかった。

食堂に行くと燐と雪男が食事中だった。

祐二は燐の隣に座った。

「燐と先生は今日どこに行っていたんだ？」

「んまあいろいろな」

その後三人で楽しく喋りながら食事をした。

次の日祐二は朝早く寮の外で待っていた。

同行してくれる先生達が来た。

どうやら四人の先生が同行してくれるらしい。

そのうちの一人が近くの扉に鍵を使い、目的地の所に繋いだ。

そこは武家屋敷を連想させるような大きな屋敷だった。

「お待ちしていました。どうぞこちらに。」

依頼人に案内させ事情を説明してもらった。

どうやら悪魔は長年この家に出ておりその度に天童家の祓魔師に依頼していたらしい。

「つまり追い払えばよいと？」

「ええ、しかしできれば退治してほしいのです。私の息子達に苦しい思いをさせたくないのです。」

「分かりました。そうしましょう。」

そして、二組に分かれることになった。

見回りをして改めてこの屋敷が大きいと実感した。

そして夜が来た。

祐二は初任務ということで緊張していた。

「大丈夫だ、私達が何かあったら守ってあげるから。」

そう先生は励ましてくれたが、少し不安そうだった。

他の先生は充分気を引き締めているのが分かった。

すると外の方で音が聞こえた。

銃声の音で悪魔が来たと分かった。

「行こう！」

先生達について行き外に出ると一人の先生が倒れていた。

その近くでもう一人の先生が必死に悪魔をちかづけないように頑張っているところだった。

外に出た先生達は一人は倒れている先生の治療を、もう一人の先生は救援に向かった。

悪魔は一匹だったが少し大きかった。おまけに攻撃は全然効いていなかった。

祐二も救援に向かった。

そして、紙を出すと

「孤高の獣よ、その姿を現し、我の力となれ」

すると紙から一匹の獣が現れた。

そして、懐から剣を出した。

「祐二君あまり無理するんじゃないよ。」

「はい、分かりました。」

三人がかりでもなかなか倒すことができない。

「くそ、なんて奴だ。」

さすがに疲れが出てきていた。

「先生サポートお願いできますか。」

「何をする気だ。」

「よし、やってこい。」

「しょうがない。サポートしよう。」

「ありがとうございます。」

先生達は銃を構え、祐二は悪魔に突撃する。

「銀狼」

狼はスピードを上げ、悪魔を撹乱(かくらん)し始めた。

悪魔の攻撃は全て空を斬っていた。

その間に祐二は悪魔の背後に回り込み、剣を降り下ろした。

悪魔は祐二に気がついたが先生の銃弾でバランスを崩し、斬られた。

「祐二君よくやった。」
「すごいじゃないか。」
「いいえ、先生のサポートがあったからですよ。」
「祐二君、腕。」
どうやら最後の攻撃の時にかすっていたようだ。
「今手当てするから、腕を出して。」
腕を出すと手際良く傷口を手当てし始めた。
手当てを受けていると辺りを心配しながら依頼人が出てきた。
「悪魔は退治したのか？」
「ええ、この子が退治しました。」
そう先生が言うと
「さすが天童家の子だ。」
依頼人はとても喜んでいた。
「では報酬は後ほど」
「よし、じゃあ引き上げる。」
「ありがとうございました。」
こうして祐二の初任務は無事終了した。

先生の携帯が鳴った。

「はい今終了しました。はい分かりました。伝えておきます。」

先生は電話を切ると

「祐二君、今フェレス卿から明日学校と塾を休んでもいいと電話があったがどうする。」

「疲れてませんから大丈夫です。」

「分かった。じゃあ休まないと連絡しておく。」

寮に帰ると燐と雪男の部屋の電気は消えていた。

祐二は自分の部屋に着くと授業の準備をして寝た。

理事長室でメフィストは祐二に同行した一人の先生から任務の事を聞いていた。

「では彼はほとんど自力で悪魔を倒したと。」

「はい、その通りです。」　「実におもしろい子ですね。」

メフィストはにやりと笑った。

「さすが天童家の子、初任務でもかすり傷一つとは、彼の父親の事を思い出しますね。」

「彼の父親と言いますと、天童晃次（てんどうこうじ）さんですか。」

「彼の父親も初任務でたいしてケガもしなかったんです。」

「やはり親子ですよね。彼の雰囲気なんとなく晃次さんに似ていました。」

「彼の成長が楽しみですね。」

第3話　祟り寺の子

悪魔歴史学の授業、ふと隣を見ると燐が堂々とよだれを垂らしながら爆睡していた。

「うーん、すき焼き。」

突然そう言い起きた。

「授業を受ける気がないなら出て行って構いませんよ。」

「すみません。」

燐はよだれを拭きながら教科書を見始めた。

燐の隣の少女は少し苦笑いだった。

少女の名前は杜山しえみ最近塾に入ってきて燐と仲がいい。

「ちぃ、なんやねんあれ。」

後ろの方で声がして振り返ると髪に金のメッシュを入れた生徒がにらむようにこっちを見ていた。

「天童君、聞いていますか？」

「あっはいすみません。」

グリモア学の授業でも燐はまた爆睡していた。

「奥村起きろ。」

先生に起こされ燐は起きた。

するとまた後ろから声がした。

「やる気あるんか。往ねや。」

今度は燐も気づいたらしく後ろを見た。

燐は一瞬その生徒を見たが前を向き、何を想像したのか小さく笑い出した。

そしてまた、先生に注意された。

悪魔薬学の授業ではこの前の小テストが返されていた。

「志摩君」

「間違えた所をしっかり復習して来てください。」

「はーい。」

「宝君」

しえみは目をキラキラさせていた。

「どうした。」

「だって得意分野なんだもん。」

「ああ、お前んち薬屋だっけ。」

「そ、祓魔師専門のね。だから得意分野って言うか」

「杜山さん」

「は、はい。」

答案を返してもらうと点数は４２点

「植物に自己流の名前を付けるのは構いませんがテストではちゃんとした名前で答えてください。」

「はい。」

「ハハハ、得意分野なのにな。」

「奥村君」

燐は2点だった。

「胃が痛いよ。」

「スミマセン。」

先生は切れ気味で、燐は申し訳なさそうに謝った。

「勝呂君」

勝呂は燐の点数を見て、

「二点、ネロでもとらへんそんな点数。女とチャラチャラしとるからやボケ。」

「はぁうるせいよトサカ。だいたいお前だって」

雪男は勝呂にテストを返す。

「良く頑張りましたね。」

すると自慢気にテストを見せてきた。

なんと98点だった。

「信じられねえよ。お前みたいな奴が９８点だなんて。」

「俺は本気で祓魔師目指しているや。他のみんなも同じや。お前みたいな意識の低い奴、目障りやからとっと出ていけ。」

祐二は確かに勝呂の言う事ももっともだと思った。

勝呂と燐は引きはなされたがまだいがみ合っている。

「お前がまともに授業受けているところなんて見たことないわ。」

「俺は実践派なんだ机に座ってお勉のは苦手なんだよ。」

「勝呂君の言う通りです。どんどん言ってやってください。」

燐は今度、雪男に突っかかった。

「雪男、お前どっちの味方なんだよ。」

「さぁどっちでしょうか？」

雪男は不気味な顔で、答えた。

「燐、とりあえず落ち着け。」

授業終了のチャイムが鳴り、なんとかその場は収まった。

次の体育実技の授業のために着替えていると燐がいないことに気がついた。

探しに行こうとすると勝呂が声をかけてきた。

「天童、お前なんであないな奴とつるんでるんや。」

「あぁ、だってあいつおもしろいから。」

「あほらしい。」

そう言って、勝呂達は行った。

燐達はその頃中庭にいた。

「あいつ、本当に頭いいのか？」

「勝呂君？秀才だよ。僕と同じ奨学金で入学して来ているしね。」

「へぇー」

「成績優秀、授業態度もいたって真面目。いっそ兄さんは彼の体中の垢を煎じて飲ませてもらった方がいいよ。」

「体中ってそこまで言うか。」

雪男は話題を変えた。

「それよりしえみさん、塾には慣れましたか？」

「うんん、私なんてまだ。」

「僕から見ればしえみさんは以前より積極的ですよ。」

「ありがとう雪ちゃん。」

雪男は次の授業の準備でいなくなり、燐としえみの二人になった。

燐が話しかけようとすると。

「あっいた。おーい、着替えなくていいのか。」

祐二がやってきた。

「おう今行く。」

すると反対側から勝呂が取り巻きを連れてやってきた。

「昼間から女とイチャイチャして、余裕ですな。お前の女か？」

「だからそうゆんじゃねえよ。」

「ならなんな、お友達か？」

「友達じゃあねえ。」

後ろのしえみは残念そうだった。

「お前こそいつも取り巻き連れて。身内ばっかでカッコ悪いんだよ。」

その言葉に髪をピンクに染めた生徒が笑った。

「なに笑うてんね志摩。」

「いや、あの子の言う通りやなと思って。」

そしてまたいがみ合いが始まった。

多分これは同族嫌悪というやつだろうと祐二は思っていた。

体育実技の授業

燐と勝呂は蝦蟇（リーパー）の先を凄い速さで走っている。

「はいはい、これはただの徒競走じゃありませんよ。悪魔の動きに体を慣らすのが目的ですよ。リーパーの動きを見極めて。」

しかし、燐と勝呂は無視して走り続けていた。

「遅いなトサカ、頭ばっか良くても実戦じゃ意味ねえんだよ。」
「なにお、実戦やったら生き残った者が勝ちや。」
勝呂は燐に飛びげりをやった。
燐はおもしろい格好で吹き飛んだ。
勝呂が燐を吹き飛んばして油断したところをリーパーが飛びかかった。
しかし、先生が鎖のレバーを引き、リーパーは中央に引っ張られた。
「何をやっているんだ君たちは死ぬ気かね。」
だか燐と勝呂は今度は取っ組み合いを始め、燐は先生と祐二に、勝呂は取り巻きの二人にそれぞれ押さえられていた。
二人が落ち着くと先生は何故か勝呂だけを引き離し、注意を始めた。
「なんなんだよあいつ。」
「ごめんな坊ごっつい野望持って入学してきはってきたから余裕ないねん。」
「野望?」
「坊はなサタン倒す言うて祓魔師目指しているんよ。笑うやろ。」

「え、そこ笑うとこ。」

燐は何故志摩が笑うのか疑問らしい。

すると坊主頭の生徒が

「そうですよ。坊は『青い夜』で落ちぶれたうちの寺を再建しようと気張ってはるだけなんですから。」

「青い夜ってなんだ？」

これには祐二も思わず声が出た。

「燐、青い夜を知らないのか？」

「こりゃ珍しい。」

「青い夜というのは、１６年前サタンが世界中の有力な聖職者の大量虐殺日のことです。」

「へぇー」

「ちなみに僕と志摩さんは坊の寺の小坊主で、再建の手伝いになればと祓魔師を目指しているんです。」

坊主頭の先生が説明し終わると授業再開となった。

「では次、神木さんと杜山さん。」

今度は女子が呼ばれた。
神木はジャージだったが、しえみは何故か着物だった。

しえみは何回も転んでいた。
リーパーはしえみが転ぶ度に止まっていた。
しえみはあれしか動きやすい服がないらしい。
先生もさすがに呆れた様子だった。
「次、志摩君と山田君。」
「はーい」
志摩と山田（フードを被った生徒）は下に降りた。
すると誰かの携帯が鳴った。
「誰や全く。」
「はい私だが？」
なんと先生の携帯で、勝呂はこけた。
「何今からかい？しょうがない子猫ちゃんだ。」
「ちゅーもーく、しばらく自習にする。」

「はぁ？」

「いいかね。リーパーは基本的におとなしい悪魔だが人の心を読んで襲いかかってくる面倒な性質を持っている。私が戻るまで競技場には決して降りず、リーパーの鎖の届く範囲に入らないこと。分かったねでは以上。今行くよ子猫ちゃん。」

「あの先生、子猫ちゃん言うてましたで。」

「なんやねんあれでも教師かいな？正十字学園ってもっと意識高い、神聖な学舎やと思ってたのに生徒も生徒やしな。」

勝呂は燐の方を向いて言った。

「なんで俺が意識低いってなるんだよ？」

「授業態度で分かるわ。」

また始まった、と志摩は呟いた。

「なら証明してみろや。」

「証明？」

「そうあれや。」

勝呂はリーパーを指さした。

「リーパーは人の心を読んで襲いかかってくる悪魔や。あいつに襲われずに戻ってきたら認めてやる。祓魔師目指すんやったらあん

な雑魚の前で心乱さんやろ。勿論、俺もやったる。どうする。」

これに祐二は口を挟んだ。

「燐、こんな勝負やってもしょうがないぞ。」

「お前は口出しするな。それともお前がするか？」

「坊。」

「あぁいいぜ。」

祐二はあっさり答え競技場に降りた。

そして、リーパーに向かってまっすぐ歩いて行った。

リーパーのすぐ近くにきてもリーパーは全く動かない。

祐二はリーパーに触ったがやはり動かない。

勝呂のところに戻ると

「こんな勝負になんの意味があるんだ？」

聞いた。

だが勝呂は逃げるように

「お前はどうするんや？」

と燐に聞いた。

「ふん、いいだろう。」

勝呂はよしと思ったが

「とでも言うと思ったか？バーカ。」

な、と勝呂は言った。

「俺もお前と同じ野望があるしな。こんなんで命賭けてらんねえんだ。」

「はっ、お前ら言うたな。」

「いやーー」

「何が野望じゃ、お前はただびびっただけやろ。」

「なんとでも言え。」

燐は全く相手にしない。

「俺はやったる、お前はそこで見とれ。」

勝呂は競技場に降りて行く。

燐や志摩は止めるよう言うがどんどんリーパーに近いて行く。

「俺はサタンを倒す！」

すると神木が笑う。

「ふ、サタンを倒すって子供じゃあるまいし。」

そして、隣の女子生徒も笑い出す。

次の瞬間リーパーがうめき声を上げて、勝呂に襲いかかる。

すると燐は勝呂の前に飛び出した。

砂煙が立ち上ぼり燐の姿が見えなくなった。

ようやく見えるようになると燐は無事のようだった。

「いいか良く聞け。サタンを倒すのはこの俺だ。お前は引っ込んでろ。」

だがやはり燐と勝呂は喧嘩し始めた。

もうみんなはすっかり呆れてしまっていた。

「はい、生徒は全員無事です。勿論、倶利加羅も抜いてません。では」

雪男は電話を切った。

「久しぶりだな、地の王アマイモン。」

「はい、お久しぶりです。兄上。」

兄上とはメフィストのことらしい。

「どうだ、虚無界（ゲヘナ）の様子は？」

「みんなぶちギレてます。サタンの息子が物質界（アッシャー）にいるなんて聞いていないと」

「ならば嫉妬に狂う兄弟にこう伝えろ。我々の弟は私の下ですく

すく育っている。万事うまくいっているとな。」

「分かりました。」

「どうした、まだ何か用か？」

「はい、兄上はいつ虚無界にお戻りになるのかと？」

「早く行け、気の短い兄弟達を待たせるな。」

アマイモンが行くとメフィストは笑い呟いた。

「戻らないと思う。私のような者にとって、こんな愉快なおもちゃばこはないからな。楽しいお遊戯はこれからだ！」

次の日、祐二が教室に行くと燐が勉強していた。

「何かの前触れか？」

「うるせい。つうか前髪邪魔だな。」

「ほらこれ使え。」

勝呂が髪止めを燐に渡した。

「それから、昨日はありがとな。」

燐はそんな勝呂に

「気持ち悪、何かの前触れか？」

どうやら燐と勝呂は和解できたらしい？

第４話　昼飯騒動（前書き）

短くてすみません。

第４話　昼飯騒動

「おはようございます、天童君。」

「どうもおはようございます、先生。あれ?、隣は?」

「あぁ兄さんはまだ寝ています。」

この寮には祐二と燐と雪男の三人しかいないのでいつも食堂はがらんとしていた。

「ヤベェー寝過ごした。」

「ごちそうさまでした。」

朝食を食べ終えると燐が食堂に入ってきた。

「雪男何で起こしてくれなかった?」

「三回起こしても起きなかったから寝かしておいた。」

「今度から４回起こせ、いただきます。」

文句を言いながら朝食を食べ始めた。

「燐、遅刻するなよ。」

祐二と雪男は先に学校に行った。

午前の授業が終わると多くの生徒がある場所に向かった。

その場所とは購買部で、毎日昼休みになると多くの生徒が昼飯を買いに行く。

「よし、行くか。」

祐二は購買部ではなく、食堂に向かった。

食堂は値段が高いのでそれほど混んでいない。

「くそ、出遅れたか。」
燐はその頃購買部にいた。やはり周りには多くの生徒がいた。
燐はその生徒達の間を走り抜け焼きそばパンを掴んだ。
だが勝呂の手も焼きそばパンを掴んだ。
「なんや、奥村君なんか、こっちで会うなんて珍しいな。」
「おぃす！」
「いつまで掴んどるんや、とっと離さんかい。」
「これは俺の焼きそばパンだ！」
「俺が先に取ったんやないか！
どちらも自分のだと主張している。
すると坊主頭の生徒が
「坊、子供やないんですから。」
「ええか、子猫丸食べ物の恨みの七台祟るっていうねん。それを断ち切るためにはここで白黒つけなああかんのや！」
燐はいつのまにか子猫丸の隣にいた。
「へぇ子猫丸っていうのか。変わった名前だな。」

「しまった、出遅れた。」
雪男が遅く購買部にきた。
「奥村君。」
三人の女子が現れた。
「あのー」
「奥村君と同じ特進科1年の樫野です。」
「西脇です。」
「大本です。」
どうやら三人は雪男のために弁当を作ってきたらしい。

「なんや、若先生モテモテですなぁ。」
「兄弟なのに大違いですね。」
「どういう意味だ？子猫丸？」
燐は親しげに話す。

雪男は燐に気がつくと

「そういえば今日は兄と一緒に昼食を取る約束をしていたんです。」

そう言って雪男は燐を連れてその場から逃げた。

「はぁはぁ、助かったよ兄さん。」

「あいつらお前のために弁当作ってきたんだろ。何で食べてやらねえだよ。」

「一度に三人前は食べられないしてしまった、誰か一人を選んでも角がたつ。」

だが燐は聞いていなかった。

「うぉ、なんだ?学食のくせに伊勢エビとかあるぞ。」

「正十字学園はお金持ちの子供が通う学校だからね。」

燐は自分もセレブの仲間入りをしたと思った。

だが、「なんだこりゃ？」

なんと学食の値段が４桁以上だった。

「だから言ったでしょ。お金持ち学校だって。」

「くそーセレブ。」

燐は袋から剣を少し出して抜こうとして雪男に押さえられていた。

「何してるんだ？」

そこには祐二がいた。

「なんでお前がここにいるんだよ？」

「なんでって昼飯を食べに来たに決まってるだろ。」

燐はぽかんとしていた。

「お前金持ちだったのか。」

やっと燐は声が出た。

三人は一番安いＡランチを食べた。

その夜、燐は寮で自分達の弁当を作っていた。

「こんな夜中に何で弁当を作っているんだ？」

主婦のちょっと知恵ということで納得した。

「まぁ頑張れ。」

そして、自分の部屋に戻った。

「おはようございます、先生。」

「おはようございます。」

すると燐が向こうから走ってきた。

「このホクロ眼鏡！！」

祐二は雪男と一緒に蹴り飛ばされた。

「誰がホクロ眼鏡だ。」

燐が怒っている理由は昨日作った弁当のおかずを誰かが食べてしまったらしい。

雪男は否定して、祐二も否定した。

すると厨房から包丁で食材を切る音が聞こえてきた。

おそるおそる厨房を覗いて見るとエプロンを着けたメフィストがいた。

しかし、毎日祐二達の食事を作っていたのはメフィストの使い魔のウコバクで、メフィストは臨時代行だった。

話はなんとなく理解できたが目の前の料理は謎だ。

「あのーこれはなんですか？」

「メフィスト特製、小悪魔風オートニールです。どうぞ召し上がれ。」

しかし、誰も飲もうとしない。

だが仕方なく、祐二は少し、燐は一気にスープを飲んだ。

祐二は気を失い、燐は三途の川まで行ってしまい、おばあちゃんが呼んでいる、と言った。

ウコバクの機嫌が直るまでメフィストが食事を作りらしい。

燐はまだ意識がはっきりしておらず、ウコバクを倒すと言った。

放課後寮に戻っていると爆発が起き、急いで戻ると祐二は雪男と会った。

「先生」

「天童君、とりあえず行きましょう。」

天童は雪男と厨房に行くと燐と悪魔が腹を膨らませて倒れた。

パチパチと理事長が棚の上で手を叩いていた。

二人は料理対決でお互いの実力を確かめ合うように闘い、友情を芽生えさせた。

祐二は夕食はメフィストが作らなくて良かったと安心した。

「天童君、貴方の夕食は私が作りましょうか？」

「いいえ、結構です。」

次の日しえみが店の商品を届けに来て寮に入って一緒にお茶をした。

しえみはウコバクが入れたお茶を飲んで美味しいとお礼を言った。

ウコバクはよっぽど嬉しかったらしくしえみが帰って手をふっていた。

燐はウコバクと話していたような感じだった。

その夜、女子生徒の悲鳴が聞こえた。

厨房に行くと燐と雪男もいた。

厨房にはウコバクらしき悪魔が女子生徒を鍋に入れて煮込み始めた。

「何やっているんだウコバク？」

祐二は止めようと近くが弾かれて棚にぶつかった。

その後は雪男がことの原因だと分かり、責任持って重箱の弁当を一人で食べた。

先生はしばらく学校と塾を休んだ。

それもそのはず、重箱の弁当はかなりの量でよく一人で食べたなぁと思うほどだった。

それ以来、先生は弁当が怖くなってしまった。

まぁ自業自得だと祐二は思った。

第5話　友千鳥（前書き）

誤字などがあるかもしれません。読みにくかったらスミマセン。

第5話　友千鳥

「さて、夏休みまで1ヶ月半を切りました。休みの前には今年度の候補生（エクスワイア）認定試験があります。」

「エスクワイア？なんだそれ？」

燐は祐二に聞く。

「エスクワイア。祓魔師の候補生のことだ。」

「へぇー」

燐はとりあえず分かったようだった。

「ちなみに候補生に上がると実戦的な授業があるため試験はたやすくありません。」

その後、1枚のプリントが配られた。

そのプリントは試験のための強化合宿の参加申込書で、参加するかしないか、また取得希望の称号（マイスター）を書いて提出する。

「なぁマイスターってなんだ？」

祐二は机に頭をぶつけてしまった。

「お前それ冗談で言っているんだよな？」

ちょうどそこに勝呂が来た。

「おいどないしたんや？」

「いや、燐が称号のことを聞いてきたんだ。」

「はぁお前それでよぉ祓魔師目指しているか？たいがいにしぃな。」

「はは、奥村君って本当に珍しいなぁ。」

「くそ、世の中にはいろんな奴がいるんだよ。」

すると子猫丸が説明し始める。

「マイスターというのは技術的に優れた人に与えられる称号のことです。騎士（ナイト）、竜騎士（ドラグーン）、手騎士（テイマー）、詠唱騎士（アリア）、医工騎士（ドクター）。この内の１つでも取得するば祓魔師になれるんですよ。」

「ふーん、なんとなく分かった。」

子猫丸は説明を続ける。

「ちなみにマイスターによって戦い方が全然ちごうてくるんですよ。」

「ありがとな子猫丸、お前はなにとるんだ？」

「僕と志摩さんは詠唱騎士目指してるんですよ。」

「詠唱騎士？」

燐は詠唱騎士を知らないようだ。

「詠唱騎士というのは経典や聖書を唱えて戦うマイスターのことです。」

今度は志摩がしゃべる。

「坊は詠唱騎士と竜騎士の２つ取るてまた気張って張るけどな。」

「へぇーさすが坊。」

「坊言うな、坊。」

「俺は何取ろうかな？てか、竜騎士ってなんだ？」

これには勝呂も呆れたようで説明し始めた。

「難儀な奴やなぁ、竜騎士は重火器で戦うマイスターのことで、騎士は刀剣で戦うマイスターのことや。」

刀剣という言葉に燐が反応した。

「今剣って言ったか？」

「刀剣で戦うマイスターのことを騎士っていうんだ。」

「じゃあ俺は騎士だな。」

「そういえば天童君は何取るつもりですか？」
「あぁ俺は騎士と手騎士を取るつもり。」
「へぇー2つですか。大変ですね。」
「てゆうかお前、刀か剣持っているのか？」
そう言われ祐二は懐から剣を出した。
「まじかよ。」
「いつも持ち歩いているんですか？」
今度の話題は祐二になりまた一層賑やかになった。
そんな様子を一人の少女が見ていた。
（やっぱり燐は男の子と一緒の方が楽しそう。燐と雪ちゃんに助けてもらって塾に入ったけど二人が私の面倒を見てくれるわけじゃないんだから。）
魔法円・印章術の授業
先生が巨大なコンパスを使い、手際よく魔法円を書いていく。
燐が動こうとすると注意された。
「図を踏むな！魔法円が破綻すると効果が無効になる。」

悪魔の召喚には自分の血と適切な呼び掛けが必要だった。

先生は血を垂らし、呪文を唱えると煙が出て、その中から屍番犬(ナベリウス)が出てきた。

その臭いは硫黄臭く思わず鼻をふさぐほどだった。

「ではこれからお前達に才能があるか、テストをする。」

どうやらさっき配られた紙に自分の血を付け、思いつく言葉を唱えるだけらしい。

「稲荷神に恐み恐み白す　　為す所の願いとして成就せずということなし。」

見ると狐のような動物が2体出てきた。

「白狐が2体も。見事だ、神木出雲！」

彼女は巫女の血統だと言った。

勝呂達もやってみるが才能がないらしい。

「わ、私もやってみます。」

今度はしえみが挑戦するみたいだ。

「おいで、おいで？」

しかし、何も起きず諦めかけた時、紙から緑色の玉が飛び出し悪魔が出てきた。

「それは緑男（グリーンマン）の幼生のようだな。すばらしいぞ、杜山しえみ！」

出雲は少し表情が曇った。

「神木さん。私も使い魔出せたよ。」

「すごーい、小さくて、豆粒みたいで、かわいい。」

「え、すごい？かわいい？」

出雲は皮肉ぽく所々言葉を強めて言ったがしえみには誉め言葉として伝わったらしい。

「孤高の獣よ、その姿を現し、我の力となれ」

みんなは今度、祐二の方を見た。

祐二は使い魔を召喚したらしく、毛が銀色のような狼が彼の足元にいた。

「ほぉ、それはワーウルフか、珍しい悪魔だな。すばらしいぞ、天童祐二！」

「今年は手騎士候補生が豊作のようだな。使い魔は魔法円が破綻すると任を解かれ消える。危険を感じたら紙を破くといい。今日の授業はここまで。」

しえみは緑男に話しかける。

「私あなたを消したくないな。ニーちゃんって呼んでいい？」

「ニィー。」

出雲はしえみから離れるように教室を出た。

しえみはその後を追うように教室を出た。

「神木さん待って！」

「出雲ちゃん？」

「無視よ、無視。私あいつのこと嫌いだし。」

しかし、しえみは後を追ってくる。

「おーい、おーい。」

出雲はうっとうしく思い振り向いた。

「なんであたしにつきまとうのよ。」

しえみは覚悟を決めたようだ。

「わ、私とお友達になってください。私今まで友達がいたことがなくて。」

「ふーん。」

出雲は何を思いついたのか、

「いいわよ。それじゃあたし達今から友達ね。」

「本当？うれしい。」

しえみはうれしそうだったが何故、出雲が友達になったのか分からなかった。

「それじゃ、早速これお願い。」

そう言いしえみにカバンを持たせる。

しえみはうれしそうにカバンを持ち出雲の後ろを歩いていく。

「なんだあれ？」

教室から出てきた祐二達はその光景を見た。

「きっと遊んどるんやろ。」

勝呂はあっさり言った。

その日からしえみは出雲のパシリになってしまった。

「これ配っておいてくれる？」

「うん。」

「次の悪魔薬学の授業で使う薬草、私の分も用意しておいて。」

「うん。」

「メロンパン、フルーツ牛乳。」

「うん。」

しえみは何でも快く引き受けていた。

祐二は見ていられなくなり、言いに言った。

「神木、彼女をパシリにするのやめろ。」

出雲は、何勘違いしているの？、と言った。

「あれは強制していないのに勝手にあっちがやっているだけ。」

そこにしえみが戻ってきた。

「お前何でそんなことをしているんだ？」

しえみは笑顔で答える。

「え、ただ友達のためにやっているだけだよ。」

どうやら友達関係を勘違いしているようだ。

「なぁ？しえみがパシられているのどう思う？」

祐二と燐と雪男の三人は寮の入り口にいた。

旧男子寮が合宿場らしい。

理由は単純でもともと住んでいるのがさっきの三人だけでいろいろと都合がいいらしい。

塾生がやってきた。みんなこれから1週間過ごす場所を見ていろいろ言っている。

（まぁ確かに幽霊ホテルっぽいよな。）

祐二も初めてこの寮を見た時もそんな事を思っていた。

出雲は思い出したようにしえみにカバンを持たせる。

そんな様子に出雲の友達の朴がしえみに、嫌なら嫌って言わなきゃ、と言うが前に祐二に言った答えだった。

そんな様子を見て燐は何か言いたそうだった。

「はい、そこまで！」

「やっと終わった。」

何が終わったかというと確認テストのようなものが終わったということだ。

燐は相当頭を使ったのか頭から湯気が出ていた。

「明日は6時起床で登校までの1時間、答案の質疑応答を行います。」

「まじですか？」

あまりのことに祐二は呟いてしまった。

「朴、お風呂入りに行こ！」

「あっ、私も」

女子三人が風呂に行く。

「はは、女子風呂か？これは覗いとかんといかんとちゃいますか？」

「志摩、お前仮にも坊主やろ！」

「また志摩さんの悪い癖や。」

どうやら志摩はエロいようだ。

「ちなみにここに教師がいることを忘れないように。」

雪男が教師としていることをアピールする。

その雪男に志摩が近く。

「教師言うたかて、あんたまだ高1やろ、無理しなさんな。」

「僕は無謀な挑戦はしない主義だ！」

その表情は固かった。

祐二はその後自分の部屋に戻って実家から持ってきた魔法円の描いてある紙を見ていた。

その紙は二種類あり、片方は銀狼の魔法円だったが、もう片方は分からなかった。

（多分もう1体の使い魔を召喚できるということだろう。）

しかし、その召喚の呼び出し方が何を見ても書いておらず分からなかった。

その時、女子の悲鳴が聞こえ、祐二は部屋を飛び出した。

悲鳴は風呂場から聞こえたと思い風呂場に向かった。

風呂場に行くとしえみが朴の治療をしていて、燐が悪魔の相手をしていた。

「燐！」

祐二は懐から剣を出し、指を少し刺し魔法円の描いてある紙を出した。

「孤高の獣よ、その姿を現し、我の力となれ」

「燐、今助けるぞ。雷(いかずち)の舞。」

祐二と銀狼は悪魔に突撃した。

祐二は悪魔の4本ある腕の1本を斬ったがすぐに再生し首を掴まれた。

銀狼は腕を2本かみちぎったがまた再生し飛ばされ消えてしまった。

祐二の首を掴む悪魔の力がどんどん強くなっていき、祐二は意識を失った。

（ここは何処だ。）

気がつくと祐二は暗闇の場所にいた。

（お前は私を受け入れる覚悟があるか？）

そして、何処からか声がする。

「どういうことだ？」

すると辺りが少し明るくなり、１匹の黒い獣が近づいてくる。

（私は天童家に代々仕える使い魔だ！今からお前の試す。）

そう言い獣は祐二に牙を向け襲ってくる。

祐二は避けるが何回もかわせるスピードではなかった。

（お前の実力はそんなものか？私を止めてみせろ！）

すると祐二は動きを止め息を吐き始める。

何かを感じるかのように。

獣が祐二を噛もうとした時、獣の牙は空を噛んだ。

祐二は獣を見事に押さえた。

（よくやった。今から私はお前の使い魔だ。）

祐二は意識を取り戻し悪魔を睨んだ。

悪魔は怯み、力が弱まった。

祐二は腕を払い、何か唱え始めた。

すると片方の紙から黒い獣が現れ、悪魔の腕を一気に2本かみちぎった。

悪魔は悲鳴をあげて、獣に襲いかかるが銃声が鳴り、悪魔は弾を受け逃げてしまった。

奥村先生が銃を持って、戸の所にいた。

「天童君大丈夫ですか？」

「大丈夫です。」

「良かった。しえみさん、朴さんは？」

しえみは朴に応急措置を施したようだ。

「処置は正しい。しえみさんがいなかったら、どうなっていたか。」

「ありがとう、しえみさん」

先生は軽く祐二を手当てをした。

「天童君もよく頑張りました。」

まぁともかく助かって良かったと祐二は思った。

「やはり天童君はおもしろい。これから楽しくなりそうだ。フフフ。」

第5話　友千鳥（後書き）

初めは銀狼の毛が銀色でしたが、銀色のようなが正しいということでお願いします。

第6話　此に病める者あり

「大丈夫ですか天童君？」

「あれ？奥村先生。」

「良かった、大丈夫みたいですね。」

祐二は今自分の部屋のベットに寝ていた。

「心配させやがって！」

雪男の隣に燐がいた。

「悪い、心配かけて。」

しかし、雪男はそんなこと思っていなかった。

「だいたい兄さんが一人で悪魔と戦ったから。」

「うるさいな、仕方ないだろあの時はああするしかなかったんだから。」

その時、祐二は何故今自分の部屋のベットに寝ているか思い出した。

悪魔がいなくなり、塾生達は自分達の部屋に戻すように奥村先生に指示された。

「あれ？」

ドスン、と音を立てて祐二が倒れたのだ。

「天童君？天童君？」

「先生、天童は？」

勝呂は雪男に祐二は大丈夫か聞く。

雪男は脈を計り落ち着いた。

「大丈夫です。多分、気を失っただけです。」

「そうですか。」

そして、祐二は雪男に抱えられ、今の状況に至っている。

「天童君が来なかったらどうなっていたか分からなかったんだよ？」

祐二は思わず笑ってしまった。

「どうしたんだ急に？」

「ああ悪い。いや、兄弟っていいって思って。」

「あのさ、今さらだけど昨日は助かった。ありがとう。」

燐が礼を言ってきたので祐二は驚いた。

「午前中ゆっくり休んでいれば、午後の塾には来れると思うので休んでいてください。」

「はい。」

「んじゃ、お大事に。」

「ありがとうな、燐！」

その日の高等部の授業は休むことになった。

祐二はその間に昨日の使い魔を召喚しようとしたが、どうやって召喚したか覚えていなかった。

「くそ、どうやって召喚したんだ？」

そう考えていると祐二は寝てしまった。

祐二が気がつくと目の前に昨日の使い魔がいた。

（どうだ、気分は？）

「別に普通だけど。」

祐二は獣は普通に会話している。

「ところであんたの名前は？」

（私の名前は空虎（からと）だ。）

「俺は昨日、どうやってお前を召喚したんだ？」

（やはり覚えていなかったか。いいだろう、教えてやろう。召喚の呼び掛けは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・だ。）

「なんで俺は昨日のことを覚えていないんだ。」

（それはお前がまだ私を扱えていないからだ！）

そして、祐二は目を覚ました。

だいぶ寝ていたようで時間を見ると昼近くだった。

昼食を食べに食堂に行きウコバクの美味しい昼食を食べた。

「ごちそうさまでした。ウコバク、美味しい昼食をありがとうな。」

ウコバクは照れながら何か言ったが分からなかった。

合宿中は普通に学校があるため燐達は今、学校に行っている。

祐二は体調がだいぶ良くなってきたから塾には行けるかと思った。

雪男から渡された薬を飲み、部屋に戻る。

（昨日、何故悪魔は寮に入ってきたのだろう？だいち、正十字学園には理事長の結界によって守られていたはず。）

「あれ？祐二君、どうしているの？」

扉の方を見るとしえみがシーツを持って立っていた。

「いやゆっくり休んでいるように言われたから。」

それより祐二は何故しえみがシーツを持っているのかが不思議だった。

「なんで杜山さんがシーツを持っているわけ？」

「あ、あの私もみんなの役に立つことがしたくて！」

「え、杜山さんは祓魔師目指しているんじゃないんだ。」

しえみは少し顔を赤らめた。

「わからない。でもまずは得意な洗濯から。」

しばらく祐二はしえみと話をした。

中でも燐のことについての話は盛り上がった。

しえみは一度家に戻ってから塾に行くと言い祐二は一人で塾に行った。

教室には勝呂達が早くも来ていた。

「ああ良かった、天童君体調良いみたいですね。」

「ほんま、倒れた時は心配したで。」

「ああごめん。でももう大丈夫だから。」

勝呂達は祐二が元気そうで安心したらしい。

教典暗唱術の授業

「大半の悪魔は『致死節』という死の理、必ず死に至る言葉や文節を持っているザマス。」

祐二はこの授業が一番苦手だった。

しかし、この授業は詠唱騎士を目指している勝呂達にとっては重要な授業である。

「詠唱騎士は『致死節』を掌握して詠唱するプロなんでございますのよ。」

教典暗唱術の先生は太っていていろいろな宝石を身に付けていていわゆるマダムと言った感じである。

「それでは宿題に出したところを暗唱してもらうでございます。」

祐二は宿題のことなどすっかり忘れていたのでかからないことを祈っていた。

「では神木さん。神木さん？」

出雲は授業に集中しておらず自分がかけらたことに気がついていない。

その理由は朴が何か関係しているのだろう。

「神木さんどうしたザマス？」

出雲はようやく気がつき慌て立つ。

「すみません、あの？」

「『デェデウム』を前回の続きから。」

出雲は深呼吸をして暗唱を始める。

「我ら日々御身に謝し、世よに至るまで、皆を」

出雲の暗唱はそこで途切れた。

「ザマス？」

「すみません忘れました。」

「まぁー神木さんあなたが珍しいでございますね。」

彼女はいつも完璧に暗唱していたので先生は驚いていた。

が、それ以上に出雲は情けなさそうな表情だった。

「では代わりに勝呂さん。」

そして代わりに勝呂が指名された。

「はい！我ら日々御身に謝し、世よに至るまで、皆を讃え奉る。」

勝呂はゆっくり正確に暗唱を続ける。

みんなはそんな勝呂に驚かされながら彼の暗唱を聞いていた。

そして、勝呂は最後の部分にきていた。

「神よ、我御身により頼みたる、我が望みは戸越えにむなしからまじ！」

「完璧でございます。」

祐二は改めて勝呂が頭が良いと実感した。

「すごいね、びっくりしちゃた！」
授業が終わりみんな勝呂の話をしている。
「いやー惚れたらあかんでぇー。」
勝呂は満足気だった。
「お前、本当に頭良かったんだな。」
「本当にってなんや！」
勝呂は燐の言葉に怒った。
「坊のは頭ええと違て暗記が得意なんですよね。」
「子猫丸、それつまり頭良いゆうことやろ！」
子猫丸は勝呂に言われすぐに同意した。
だが出雲は快く思っていなかった。
「暗記なんて誰にもできるじゃない！」
「あぁなんか言うたかこら！」
勝呂がこれに突っかかる。
「ふん、四行も覚えられん奴に言われたないや。」

「私は覚えられないんじゃない！覚えないのよ！詠唱騎士なんて詠唱中は無防備だからパーティーにお守りしてもらわなきゃいし！ただのお荷物じゃない！」

勝呂は詠唱騎士をそして自分達を侮辱されついにキレた。

「やんやと？詠唱騎士目指しとる者に向かってなんや！」

出雲は前に出てくる。

「コワーイ？殴りたきゃ殴りなさいよ！」

そして勝呂も前に出てきた。

「だいたいお前は気に食わへんのや。人の夢を笑うな！」

そう言い燐のいる机を思い切り叩く。

燐はその教科書を読んでいた。だか勝呂が机を叩いたせいで読むのをやめた。

そして、勝呂と出雲のケンカはますます激しくなっていく。

「あー、あの魔神を倒すってやつ？あんな冗談笑う以外にどうしろっていうのよ？」

「じゃあなんや、お前は何が目的で祓魔師なりたいや？言うてみー！」

「目的？」

何故か出雲は何か思い出すと視線をそらし、俯く。

「私は他人に目的を話したことはないの。あんたみたいな目立ちたり屋がと違ってね！」

次の瞬間、勝呂は出雲の胸ぐらを掴んだ。

さすがにこれ以上はヤバイと祐二は急いで二人の間に入ろうとしたが出雲のビンタが立ち上がった燐に当たった。

「いてーな、ケンカするならよそでやれよ！」

なんと燐まで加わってしまった。

「はい、そこまで！いい加減にしてはどうです？」

雪男が呆れた様子でケンカを止めた。

その夜、雪男はみんなを一室に集め一人一人の膝の上に嚙石（バリヨン）を乗せた。

「なんだよこの漬物石？だんだん重くなるじゃねいか！」

「これは下級の悪魔ですわ！乗っているうちに、ああまた重なった！」

子猫丸は説明しようとしたが囀石が重くなりできなかった。

「これは囀石っていう下級悪魔で持ち上げたり、乗っているとだんだん重くなるんだ。」

祐二はきつくないのか、いつもと同じくらい落ち着いていた。

「天童君、よぉ平気やなぁ？」

すると雪男が話を始めた。

「いいですか皆さんこの合宿の目的は学力強化ともうひとつ、交友を深めるっていうのもあるんです！」

だが出雲はすぐに反対した。

「こんな奴らと馴れ合うなんてごめんよ！」

「馴れ合ってもらわなければならない！祓魔師は一人では戦えない！」

雪男は喝を入れる。

「お互いの特性を活かし、弱点は補い、二人以上のパーティーで戦うのが基本です！実戦ともなれば仲間割れは生死に関わることも

ある。」

みんな真剣に雪男の話を聞いている。

「では僕はこれから3時間小さな任務で外します。しかし、昨日の屍の件もあるので一応この寮に繋がる扉全てに鍵を掛け、強力な魔よけを施して措きます。」

「鍵って俺らどうやって外に出るんですか？」

「出る必要はありません。僕が戻るまで3時間みんなで仲良く頭を冷やしてください。」

雪男は笑いながらそう言い行ってしまった。

勝呂は出雲を見た。

「つうか誰かさんのせいでえらい目や？」

「はぁあんただった私の胸ぐら掴んだでしょ？」

雪男がまたケンカを始めてしまった。

「先にケンカ売ってきたのはそっちやろ！」

「また微妙に俺を挟んでケンカするな！」

燐は勝呂と出雲の間にいるので相当ストレスがたまる。

「本当、性格悪い女やな！」

「ふんそんなの自覚済みよ、それが何？」
「そんなんやと周りの人間逃げて行くで！」
出雲は痛い所を突かれ何も言い返せなかった。
「なんだ？」
突然電気が消えてしまった。
「イテー、囀石が足に！」
「なんやあの先生電気まで消していきはったんか？」
「まさか？」
「停電？」
突然電気が消えてみんな少し慌てている。
「でも外は明かりが点いているぞ！」
「ってことは停電はこの建物だけってことか？」
「出てみよ！」
「志摩さん、気いつけてな！」
志摩が出て行くというので子猫丸が心配する。

「はは、俺こうゆうハプニング、ワクワクするたちなんや！リアル胆試し！」

志摩は壁に手を当てて扉まで行く。

そして、扉を開けて出て行こうとすると外にツギハギだらけの物が居て志摩はすぐ扉を閉めた。

「なんや、寝不足やろか？今何か」

次の瞬間、扉が壊れ伸びた手が志摩を掴む。

「志摩！」

勝呂が言うのと同じくらいで祐二は鞘を払い、志摩を掴んでいる腕を斬り落とし、志摩を抱えて後ろに退いた。

「ありがとう、天童君。」

祐二はすぐ悪魔の方を向く。

（昨日の屍番犬か）

頭が二つあり、片方の頭は目がない。

だがその片方の頭が開きかけていた。

するとバシャン、という音と共に体液が塾生達に降りかかる。

「なんだ？」

しばらくすると塾生達はさっき被った体液のせいで皆風邪のような症状に見舞わた。

そして、悪魔はどんどん近いてくる。

しえみはみんなを守る方法を思い付いた。

「ニーちゃん！ウナウナ君を出せる？」

すると緑男の体から太い木が悪魔を突き刺し、塾生達のバリケードになった。

「ありがとね、ニーちゃん！」

みんなひと安心したがそれは一瞬だった。

悪魔の体が二つになり、片方がバリケードを壊し始めた。

元気そうな燐はバリケードの中に行く。

「燐、何するつもりだ？」

「俺が囮になって悪魔を引き付ける、その間にお前達は逃げろ。俺のことは心配するなそこそこ強いから。」

「奥村、戻ってこい！」

「奥村君！」

しかし、燐はバリケードを進んでいく。
燐は悪魔を引き付けてどこかに行ってしまった。
「なんて奴や！」
「とにかく早く出ましょう、杜山さんもうバリケードはええから。
」
「待ちいな、今何か聞こえんかったか？」
塾生達はバリケードを見る。
もう一匹の悪魔がバリケードの間から見た。
「天童君、どないしよ？」
しかし、返事がない。
そこで初めて祐二がいないことに気づいた。
「まさか？」
勝呂は祐二が燐を追いかけて行ったと確信した。

「くそ、燐の奴どこに行った？」

祐二は勝呂の思ったとおり燐を追いかけていたが燐を見失った。

すると向こう側から音がしたので行ってみた。

少し走ると奥の部屋から青い光が出ていた。

部屋の中を覗くと燐が青い炎を纏っているのが見えた。

（なんで燐が青い炎を？）

祐二が飛び出そうとすると声が聞こえた。

「そうそう、その青い炎が見たかったんだ！」

姿を現したのは魔法円・印章術の担当のネイガウス先生だった。

（なんでネイガウス先生が？）

だが次の言葉で祐二は混乱した。

「奥村燐！魔神の息子よ！」

（え、燐が魔神の息子？）

祐二は混乱したが燐が青い炎を纏っているので魔神の息子かと思った。

青い炎は魔神の力で１６年前もその青い炎で祐二の両親を含めた有力な聖職者が犠牲となった。

「昨日のも今日のもお前がやったのか？」

「あぁそうだ！それよりももっと見せろ、その力を！」

燐は剣を抜いた。

すると青い炎は強くなり、剣が悪魔に刺さると悪魔は焼かれてしまった。

そして、ネイガウス先生は消えた。

一方、勝呂達は詠唱で悪魔を倒そうとしていた。

勝呂は『ヨハネ伝福音書』を詠唱している。

２１章あるが子猫丸と協力して詠唱していた。

悪魔はバリケードの間に体を入れて通り抜けようとしていた。

志摩は錫杖と呼ばれる物を持って悪魔をつついているが効果がない。

するとしえみは倒れ、バリケードは消えてしまった。

志摩は錫杖で戦うがやはり効果がない。

出雲はしえみに駆け寄る。

「ちょっとあんたしっかりしなさい！」

「神・・・木・・さん。」

意識がまだあるようで出雲はホッとする。

「今日はいつも神木さんじゃないみたい・・・大丈夫？」

（大丈夫ですって？この私がこんな子に心配されるなんて、私らしくもない。）

出雲は折り畳まれた紙を2枚出す。

「稲荷神に恐み恐み白す　　為す所の願いとして成就せずということなし。」

やはり白狐が出てきたが前に何かあったのか、

「ウヌめまた性懲りもなく呼び出しおって！」

「身の程を知れと」

出雲は使い魔の言葉を無視して怒鳴った。

「私に従え！」

白狐達は急に黙った。

「1、2、3・・・・・・」

（性格悪くて、負けるの大嫌い）

心の中でそう思い唱え始める。

「ふるえ、ゆらゆら・・・・・・」

（それが私よ！）

「たまゆらの払い」

すると白狐達は悪魔の周りを光を発しながら回る。

しかし、暗闇で活発化した悪魔は白狐と近くにいた志摩を弾く。

悪魔は詠唱をする勝呂の頭を掴むが勝呂は詠唱を続ける。

悪魔が勝呂に噛みつこうとした時明かりが点き悪魔は怯んだ。

勝呂は最後の部分に入った。

しかし、悪魔はまだ強い力で勝呂の頭を掴んでいる。

「我、思うに・・・世界もその録すところの書を載するに・・・・・耐えざらん！！！」

詠唱を終えると悪魔の皮が剥がれ、黒い塊もすぐに消えてしまった。

「はっ、坊！」

「し、死ぬ！」

勝呂は震えていた。

「良かった、良かった。」

燐は勝呂達の所に走っていた。

「燐！」

燐が後ろを振り返ると祐二がいた。

「あれ？他のみんなはどうした？」

「多分まだあの部屋だ。」

祐二は燐に本当のことを聞きたかったが話すわけないと思った。

「とにかく急ごう。」

祐二は燐とみんなの所に行った。

勝呂達は悪魔を倒し安心していた。

出雲はしえみの体を起こした。

「私あんたが大嫌い！」

「え？」

「でも今回は助かったそれだけ。」

「うん！」

しえみは嬉しそうに返事をした。

すると祐二と燐が現れた。

「お前らもう一匹は？」

「あぁ倒した！お前も倒したのか、すげーな！」

勝呂は燐を殴った。

「死にたいんか？」

「待て、お前が俺を殺す気か？」

「天童、お前もや！」

「あぁごめん。」

祐二は燐のこと頭になかった。

「どうしたですこれは？」

雪男が驚いた顔で戻ってきた。

祐二と燐は雪男の後に入ってきたネイガウス先生に驚いた。

（なんでネイガウス先生が奥村先生と一緒に）

第7話　理由（前書き）

更新が遅くなりました。その割に面白くないかもしれません。面白ければ幸いです（＾－＾）

第7話　理由

「奥村先生、いつからネイガウス先生と一緒でした？」

祐二が尋ねた。

「ゆ、雪男そいつはて」

言い終わる前に燐は誰かに後ろから蹴られた。

「てーーーーあ！」

祐二は燐を見た後、燐が立っていたところを見るとピエロのような格好をした人がいた。

それは正十字学園の理事長のメフィストだった。

天井の一部が外れ、そこに手を掛けてぶらさがっていた。

「はーい！訓練生の皆さん、大変お疲れ様でした！」

「え、理事長？」

祐二達は突然の理事長の登場に驚いて何も言えない。

「この私が中級以上の悪魔の侵入を許すわけがないでしょう。」

メフィストが指をパチンと鳴らすといろいろな所から先生達が姿を現した。

「医工騎士の先生方は生徒達の手当てを。」

メフィストの指示で医工騎士の先生達は生徒達に注射を打つ。

「まさか？」

みんなは状況を理解した。

「サプライズ！そう、この強化合宿は候補生認定試験を兼ねたものだったので～す！」

「うそだろ？」

祐二はやっと言葉が出たが小さな声だった。

「合宿中はそこかしかに先生方を配置して、皆さんを細かくテストしていました。」

雪男は燐に、ごめん、といった顔を向けた。

「ちなみに皆さんが倒した悪魔は、ネイガウス先生の屍番犬でした！これから先生方の報告書を読んで、私が合否を最終決定します。発表を楽しみにしていてくださいね☆」

「くっそ～～～！！はぁ・・・」

あの後、生徒達は医務室に連れてこられ点滴を受けている（燐以外）。

「まさか抜き打ち試験だったとはな！」

燐はみんなと同じで屍番犬の体液を被ったのにぴんぴんしている。

「はぁ～僕大丈夫やろか？」

「なんや？そんなもん、今考えてもしゃあないで！」

「坊や志摩さんはええですよ、僕なんかろくに腰立たんようになっていたんですから。」

子猫丸は不安で一杯だったが意外に出雲が励ます。

「あんた達は大丈夫でしょ、訓練生に求められる素質は実戦下での協調性。それでいうと私は最低だけどね。」

「まぁ、俺も大事な時にいなかったけどな。」

祐二は燐を追いかけていったが何もできなかった。

「お前らは全然ましやろあいつらなんか完全に外野を決め込んでおったんやぞ！なんか言うないんか、ええっ！？」

勝呂の言うあいつらとは宝と山田のことだ。

「やった～、麟竜の爪、ゲット！」

「けっ、うるせーガキどもが！お前と話すことなんかありゃしねえんだよ！」　山田はいつも通りゲームでモン〇ター〇ンターをやっている。

宝は毒舌を披露した。

「しゃべった！あいつらずっと謎だったんだよな！腹話術、超上手いじゃん！」

すると燐の声のせいかしえみが起きた。

「みんななんのお話しているの？」

「試験のことについてな！」

「一番の功労者は杜山さんやな！」

確かにしえみがいなかったらどうなっていたか？

「そう言うたら奥村君達どないしてあの屍倒したん？」

いきなり話題が変わった。

「いや、俺は明かりが点いてから燐を見つけたから。」

「あっ俺は・・・こいつで・・・グサッと。」

燐は困りながらも答える。

「はあ～、すごいな。騎士の素質あるんやね！」

「なんや、こいつでグサッと、って抽象的すぎるわ。」

賑やかになっても祐二はまだ燐のことが気になっていた。

魔法円・印章術の授業

「天童祐二！天童祐二！」

ネイガウス先生は何回も祐二の名前を呼ぶ。

だが祐二は燐の方を見ていて気がつかない。

「天童君！呼ばれていますよ！」

「えっ？」

祐二は子猫丸に言われて気がつく。

「あっすみません。」

「まぁいいあまり授業に集中できていないようだな。もういい、代わりに神木出雲この魔法円を完成させろ。」

「はい！」　出雲は前の黒板に描いてある魔法円の続きをすらすらと完成させた。

「よろしい！」

出雲は祐二に笑ってやったが祐二はまた燐の方を見ていた。

祐二は魔法円・印章術の授業ではクラス一番の成績だった。

おまけに出雲と同じく使い魔を2体召喚でき、どちらの使い魔も出雲の白狐よりも強い。

そのため祐二はネイガウス先生の一番のお気に入りだった。

だがさすがに一番のお気に入りといっても授業に集中していないのでネイガウス先生は呆れた。

「天童君が魔法円・印章術の授業に集中していないなんて！」

「あいつ、昨日の夜からなんか変やな？」

勝呂達は祐二のことが気になっていた。

「そういえばいつの間にか天童君いなくなっていますよ！」

「もう帰ったんとちゃいます？」

「せやなワイらも帰るか！」

その頃祐二は燐と競技場にいた。

「なんだよ用って！」

燐は塾が終わり寮に帰ろうとすると、ちょっと用があるんだけど、と言われ祐二について行った。

だが競技場についても祐二は黙ったままである。

「おい！聞いてるのか！」

すると祐二は魔法円の描いてある紙を取り出す。

「孤高の獣よ、その姿を現し、我の力となれ」

祐二は銀狼を召喚する。
そして懐から剣を出す。
「何の真似だ！」
だが祐二は何も言わず燐に斬りかかる。
「くっ！！」
燐は間一髪のところでかわす。
だが燐がかわしたところに祐二の使い魔である銀狼が襲う。
「ざけんな！」
そう言うと青い炎が燐を包む。
銀狼は青い炎が出たとたん間合いを取る。
「燐！１つ確認していいか？」
祐二はやっと口を開いた。
「なんだ？」
「燐！お前は魔神の息子なのか？」
燐は自分が今青い炎を出していることに気づく。

「・・・・・・・・」

今度は燐が黙ってしまった。

「正直に答えろ！」

「・・・・・・・・・・」

やはり燐は黙ったままである。

「なら実力行使だ！」

またも祐二は燐に斬りかかる。

だか燐は避けようとしない。

「！？」

祐二の剣は燐を斬り、銀狼は燐の太ももに噛みついた。

しかし、燐はただ立っているだけである。

「確かに俺は魔神の息子だか俺は魔神を父親だと思ってない！」

燐は自分は魔神だと正直に言った。

燐は口から血を出していた。

「何で祓魔師になろうとしているんだ？」

「俺はただ仲間が傷ついていくのがいやで、仲間を守るために強くなりたいと思ったからだ！」

祐二は紙を破いた。

「？」

紙を破いたため使い魔の銀狼は消えた。

「悪かった。だか許してくれ。俺は青い夜みたいな惨劇を二度と起こさないために祓魔師を目指しているんだ。」

祐二も自分の目的を言った。

その後祐二はこのことを他のみんなに言わないと約束をした。

「夜の空っていいな。」

その夜祐二は寮の屋上に来ていた。

祐二はコンクリートの床に仰向けになっていた。

「はぁ試験合格しているかな？」

夜の空を見ながら祐二はそんなことを考えていた。

だんだん時間も遅くなり部屋に戻ろうとすると屋上の扉が開く音がした。

祐二は下を見ると腕を押さえながら歩くネイガウス先生の姿が見えた。

先生の腕から血が滴っている。

するとまた扉が開き今度は雪男が銃を構えながら出てきた。

「先生なぜ兄を殺す必要があるんです！？。」

（えっ、ネイガウス先生が燐を？）

するとネイガウス先生の腕から屍番犬の腕がいくつも雪男めがけて飛んでいく。

雪男はホルダーからもう1丁銃を取り出す。

パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！

雪男は見事な腕前で腕を撃ち落としていく。

（奥村先生すげぇ！）

だが撃ちそこねた腕で雪男を掴み飛ぶ。

雪男は聖水を取り出して自分にかけ腕を消す。

ネイガウス先生は魔法円を描きコンパスで自分の腕をえぐり血を魔法円に垂らす。

「視よ　此に在り。屍體のある所には　鷲も亦あつまらん。」

すると魔法円から巨大な屍番犬が姿を現す。

その時屍番犬の体が少し傾いた。

「なんだ？」

ネイガウス先生は一匹の毛が銀色っぽい獣がいるのを見つけた。

その獣は雪男の前に着地する。

「奥村先生、大丈夫ですか？」

「天童君！なんでここに？」

雪男は祐二がいることに驚く。

「そんなことよりあの屍番犬をどうにかしないと！」

「天童君、僕が悪魔の気を引き付けておきます。その間に魔法円を消してください」

「分かりました。」

雪男は祐二の前に立ち悪魔に向かって発砲する。

弾は命中するがそこから腕が生え雪男を壁に放り投げる。

ブスッ！

その音と共に悪魔の体が青い炎に包まれる。

そして、悪魔の頭の上から燐がネイガウス先生に飛びかかる。

（バカ、燐！）

ネイガウス先生は聖水を燐にかける。

燐の体を包んでいた青い炎は消え頭に燃えている炎だけが見えた。

「ははははっ　人の皮をかぶっていても聖水が効くようだな。やはり本性は隠しきれないか！」

燐は立ち上がりゆっくりネイガウス先生の方に歩く。

だが燐は悪魔に捕まり首をもがれようとされている。

いや音が響くがネイガウス先生は笑っている。

だが突然燐を掴んでいた悪魔が消えた。

「間に合った。」

祐二が魔法円を消したからだ。

「ちっ、消されたか！」

ネイガウス先生は腕を祐二の方に向けるが喉元に燐が剣を構える。

「先生もう止めてください！」

「お前は何者だ？」

「ふっ俺は青い夜の生き残りだ！」

青い夜の生き残りと聞き祐二は、まさかネイガウス先生が青い夜の生き残りだったなんて、と思う。

ネイガウス先生は眼帯を外し祐二達に潰れた眼を見せた。

ネイガウス先生は眼と大切な家族も失ったらしい。

「許さん魔神！そして悪魔と名のつくものは全て！魔神の息子など、もってのほかだ！」

「燐を殺してどうなるんです？家族が戻ってくるわけじゃない！憎むのは魔神だけじゃないんですか？」

祐二はネイガウス先生を説得するがそれは無駄だった。

「うるさい、貴様達に何が分かるというんだ！魔神の息子は殺す！この命と引き換えてでもな！」

ネイガウス先生の腕から屍番犬の腕が飛び出し、燐の腹に刺さる。

「燐！」

「兄さん！」

だが燐は祐二の時と同じで避けようとしなかった。

そんな燐を見てネイガウス先生は表情を変える。

「気ぃ済んだかよ？」

燐は剣を鞘に戻す。

「こんでも足りねぇっていうなら、俺はこういうの慣れてるから何度でも、何度でも相手してやる！けどなぁ、関係ねぇ人間まきこむな！」

その言葉にネイガウス先生は動かされ、腕を押さえながら出口に向かって歩く。

燐とすれ違う時なにか言ったが聞こえなかった。

「燐、大丈夫なのか？」

燐は祐二と雪男に傷口を見せる。

「すげぇ、傷口がもう閉じかけている。」

燐は浮かない表情を浮かべる。

「これじゃ本当の化け物だな。」

すると屋上の扉が開きしえみが駆け寄ってくる。

「り、燐どうしたの？」

燐を見ると悪魔の尻尾が出ていて、燐は慌てて隠す。

しかし、しえみは傷口を見て燐を無理やり寝かせて使い魔からアロエ（しえみが言うにはサンチョさん）を出し、燐の傷口に貼る。

「ありがとな！もう大丈夫になってきたかな。」

「燐！私決めた！」

燐は何がと聞くがしえみは雪男の方を見て頷く。

雪男はなにか呟いたが聞けなかった。

「アイ、ツワイ、ドライ☆無事、全員候補生昇格おめでとうござ

いま～す！」

メフィストから全員昇格と聞きみんな喜びに浸る。

「では皆さんの昇格を祝して」

その言葉に燐達は期待する。

「もんじゃをごちそうします。」

やっぱり期待しなくて良かったと祐二は思う。

期待していた燐達からは不満の声が上がるがメフィストは頑固として変えようとしない。

その後燐達はメフィストに説得され渋々駄菓子屋に来た。

だが駄菓子屋に着くとさっきまでと逆にハイテンションになった。

みんなもんじゃができるまで雑談をしていた。

ふと祐二が外を見ると着物姿のメフィストと雪男が話していた。

雪男はいつも以上に顔が険しかった。

「先生～、ラムネでええんですか？」

志摩の声でこっちにくる雪男だがメフィストはまだ外にいて誰かと電話し始めた。

「私だ。」

「はい！」

「ネイガウスは私のいう通りに動いたがやはり荷が重すぎたようだ。お前今すぐ正十字学園にこい。」

「僕は兄上の結界で学園に入れません。」

「ネイガウスに手引きさせる。それともう一人面白い奴がいるぞ。まぁ詳しいことはまた後だ。」

もんじゃができ勝呂が言うとメフィストは電話を切り、テーブルに戻ってきた。

メフィストの電話相手は地の王『アマイモン』で血まみれの手で携帯を持ち、狂気に満ちた顔で通話が切れている携帯を見ていた。

「父上と兄上が夢中になっている奥村燐、どれ程のものだろうな？それともう一人面白い奴か！少しは退屈しのぎになるといいけど！」

アマイモンは巨大な悪魔の死骸の上に乗っていた。

第8話　再会（前書き）

とても短いです。ちなみに新キャラ登場します。どうぞご了承ください（^^;）

第8話　再会

「えー今日は新入生を紹介します。入ってきてください！」

（？誰だ、こんな時期に）

そう思っているのは祐二だけでなく、他の塾生達も同じことを思っていた。

入ってきたのは女子生徒だった。

「はじめまして、星野美咲と言います。よろしくお願いします。」

みんな驚いている中、祐二は顔が真っ青だった。

なかなか可愛いので志摩が質問する。

「あの～、好きなタイプは？」

すると美咲は祐二の方をちらっと見る。

「好きなタイプはどんな時でも頼りになる人です！」

「あの～じゃあ、スリーサイズは？」

しかし、その質問は雪男に却下され終わった。

「では美咲さん好きな場所に座ってください。」

そう言われ美咲は祐二の隣に座った。

「なんできたんだよ？」

「え～別にいいじゃん！」

「バカ、ここがどうゆう場所か分かっているのか？」

「悪魔払いの仕事をする場所でしょ！大丈夫だよ！」

「そこの二人静かに、授業中ですよ！」

雪男に注意され二人の会話は一時中断した。

「ねぇ祐二君と美咲さんはお知り合い？」

意外にもしえみから質問がきた。

「まぁ幼馴染みかな？」

「うん、そう私達幼馴染みなの！」

「なんや、天童君こないな可愛い子が幼馴染みやなんて羨ましいなぁー。」

まるで学校の転校生がきたような賑やかさだ。

「ところである程度の知識はあるんだよな？」

「全然♪」

祐二はあまりのことで頭を押さえる。

「だから今度教えてよ！」

「はぁしょうがない。勝呂悪いけど時間があったらでいいから手伝ってくれ！」

「なんで俺が？」

「だって、薬学や経典暗唱術のクラスで一番だから。」

結局、勝呂は文句を言いつつ最終的に嫌々了解した。

「ほんなら、暇な時にでも行くわ！」

「ありがとな。」

「もしもし。」

正十字学園の理事長のメフィストは電話に出る。

「どうゆうつもりですフェレス卿？」

「はて、なんのことです？」

電話の相手は雪男だった。

「なぜ候補生認定試験の後に、それもあまり知識のない一般人の入塾を許可したんです！」

雪男はメフィストの判断に不満で仕方なかった。

だがメフィストはいつも通り冷静だった。

「奥村先生、何か勘違いをしていらっしゃいますね！」

「どうゆうことです？」

「私のまだ彼女の入塾を許可していませんよ！」

「・・・・？」

雪男はそう聞き黙った。

「彼女の入塾は今度臨時に行う候補生認定試験の結果で判断します。」

「ではなぜ今日塾に案内するように指示されたんですか？」

「とりあえず塾に慣れてもらおうと思ったからだです。しばらくは別室で授業を受けてもらうつもりです。」

「分かりました。」

「あぁちなみに彼女の授業は空いてる先生が交代でしてもらいますから。」

そこで電話は切れた。

「あれ？先生、星野さんは？」

志摩は美咲がいないことにいち早く気がついた。

「美咲はしばらく別室で授業を受けてもらうということになりました。」

「そんなアホな！」

志摩はやる気を無くしたようだ。

（まぁ確かに知識不足だからな。）

祐二はそんなことを思いつつ授業を受けた。

第8話　再会（後書き）

燐）おい！俺の出番は？

作）あれ、燐どうした？

燐）どうしたじゃあね俺の出番は？

作）あれ、燐せっかく用意したのに言わなかったのか？

燐）聞いてねぇよ！

雪）まぁ兄さんこれは天童君が主役だから。

燐）けど次はちゃんとした出番用意してくれよ！

作）残念、次は燐ちょっとしか出番ないから。

燐）おい！

作）まぁまた今度な。

燐）チキショー見てろよ。

作）あぁ変なことしたら出番減らすからな！

燐）頑張って続き書いてください。

作）次を楽しみにしていてください。

第9話　山の主

「は～～～。」

祐二はほとんど人のいないバスに揺られていた。

バスには祐二の他に宝と山田が乗っていた。

いろいろあったがようやく候補生としての初任務が与えられたのだ。

「楽しみだな！」

「なんか緊張してきましたね！」

みんな何の話をしているかというと任務のことについてである。

「皆さん静かにして下さい。これから3つの組分けを発表します。」

それを聞き、一層騒がしくなったが雪男の咳払いで静まる。

「えーまず、勝呂、三輪、杜山は囀石探しをしてもらいます。」

「頑張りましょう！」

子猫丸は勝呂としえみに言うと次の班が発表される。

「次は奥村、神木、志摩は悪魔よけの薬草探しをしてもらいます。」

「薬草探しって最悪だな。」

燐はわざと大きな声で不満を言う。

「最後に宝、天童、山田は小鬼探しをしてもらいます。」

祐二は小鬼探しだが宝と山田が一緒だと聞きガッカリする。

「詳しいことはまた後日呼び出しがありますのでその時に。」

そして、塾が終わると任務のことで盛り上がった。

「薬草探しとかやる気無くすな！」

「俺なんか他のメンバーが宝と山田だぞ！」

お互いに愚痴を漏らす。

そう祐二は燐達とは違う班に入ってしまった。

勝呂と子猫丸としえみは囀石探しで多摩川に、燐と志摩と出雲は悪魔よけの薬草探しで海に行かされた。

祐二はこの二人と一緒にホブゴブリン（小鬼）の捜索をすることになった。

バスが正十字学園を出てからずっと沈黙の時間（山田のゲームの音以外）が続いていて祐二には居心地が悪かった。

「次は新栄町、新栄町。」

目的地に近づき祐二はようやくこの空気から解放されると思った。

バスを降りると男性の祓魔師が祐二を待っていた。

「私は渋谷玄一だ。君達が宝君、祐二君、山田君？」

「そうです。」

宝と山田は喋らないと思い祐二が答えた。

「ではどうゆう任務か知らされているな。」

祐二はコクリと頷く。

「では拠点に案内するからついてこい。」

祐二達は言われるままついていく。

歩いているとあちこちにゴミが捨ててあるのが目についた。

しばらく歩くと拓けた場所にキャンプ場があった。

「甲斐卿、祓魔塾の生徒が着きました。」

祐二は甲斐卿のいくつもの修羅場を乗り越えてきたような風格に圧倒された。

「私は上二級祓魔師の甲斐光司だ！よろしく。」

「甲斐卿。」

挨拶が終わると一人の祓魔師が何か耳打ちをする。

「悪いが少し待っていてくれ！」

そう言うと近くのテントの中に入っていった。

しばらくすると甲斐卿が出てきた。

「玄一みんなを集めてくれ。」

「分かりました。」

「あの？何かあったんですか？」

しかし、甲斐卿は何も言わなかったが悲しい眼をしていた。

「みんなに悲しい知らせがある。昨日重傷を負った祓魔師がさっき死んだ。」

それを聞き周りがどよめく。

「そこで予定を変更する。これからいくつかの班に分ける。大きく分けると二つだ。」

そして甲斐卿の指示で６つの班ができた。

小鬼捜索の班と死んだ祓魔師が重傷を負った付近の調査の班がそれぞれ３つだ。

勿論、祐二達候補生は小鬼捜索の班だ。

一方、調査の班は甲斐卿とその部下達だ。

「祐二君、よろしく。」

声をかけてきたのは玄一さんだった。

玄一さんは祐二の班のリーダーに選ばれた。

「こちらこそ。」

「では各リーダーは集まってくれ！」

「じゃあまた後で。」

玄一さん達は甲斐卿の周りに集まった。

「君達も大変だな初任務だって言うのにいろいろバタバタして。」

「ええまぁ。」

祐二達は今、小鬼捜索中である。

班は四人一組でどの班にも必ず医工騎士がいる。

祐二の班の医工騎士は玄一さんで他の二人は竜騎士だった。

「あの～一つ聞いてもいいですか？」

「ん？なんだい？」

「甲斐卿達が調査しに行った場所で何があったんですか？」

すると玄一さんの顔が強ばる。

「実は君達が来る前にこの山を調べることになって、数人の祓魔師が調査しに行ったんだ。」

突然、玄一さんと二人の祓魔師が止まる。

祐二も止まり辺りを見回すと小鬼が向こうからやってきた。

「来るぞ！」

みんな武器を構えるが小鬼の姿を突然、霧が隠してしまった。

「みんな動くな！」

だんだん霧は濃くなりお互いの姿が完全に見えなくなってしまった。

「孤高の獣よ、その姿を現し、我の力となれ」

祐二は魔法円の紙を出し銀狼を召喚する。

「何か分かるか？」

銀狼は匂いをかぎ分け、威嚇するように唸りだした。

「悪魔だ！」

そして、悲鳴が聞こえた。

すると霧が晴れていき、一人の祓魔師が倒れている姿も見えた。

「大丈夫か？」

玄一さんが先に倒れている同僚に駆け寄る。

「大丈夫なんですか？」

「あぁ、気を失っているだけだ。」

バン、バン

ひと安心すると近くで銃声が鳴り響いた。

「玄一さん、一人いません。」

「まさか今の銃声は！」

「待て、祐二君！」

祐二は銀狼に薬莢《薬莢》の匂いを探してもらいその場に着いた。

「！！！！！！！」

祐二は言葉を無くした。

その場には背中から血を流しうつ伏せに倒れている祓魔師がいた。

傷の深さと流れている血の量でもう死んでいるのは分かった。

「これは！？」

倒れていた祓魔師を背負いながら玄一さんが来た。

玄一さんは携帯をポケットから出し、メールを打ち始めた。

メールを送信し終えると死んでいる祓魔師を背負った。

「祐二君すまないが私が背負ってきたもう一人を頼む。」

そして、二人がキャンプ場に戻ると他の班はすでに戻ってきていた。

すぐに玄一さんは甲斐卿の元に走った。

「もう危険です！早く山を降りた方がいいですよ！」

「仕方ないな！」

その後明日の早朝にこの山を降りることが知らされた。

理由は勿論二人も祓魔師が死んでしまったからだ。

「それでは下山するが決して離れず、まとまって行動すること！」
甲斐卿のこれ以上死人を増やしたくないという意思が含まれていた。
「悪いね、初任務なのにこんなに早く終わらせてしまって。」
「いや別に。」
祐二は昨日見た祓魔師の死体が未だに脳裏に焼き付いていた。
（これからもああゆう場面に出くわすかもしれないんだ！早く慣れよう！）
下山は下り道が多いので来るときよりは楽だが悪魔が襲ってくるかもしれないから気を配っていなければならなかった。
早朝に出発したがもう昼頃になっていた。
荷物を持っている祓魔師がいるため足取りは遅いがそれにしても遅すぎと祐二は思った。
すると甲斐卿は方位磁石を取りだし方角を確認しだした。
「甲斐卿？」
玄一さんは不思議に思い声をかけると甲斐卿が突然叫ぶ。
「みんな！伏せろ！」

次の瞬間どこからか風が吹き黒い羽が混じって飛んできた。
声に反応した祓魔師は当たらなかったが反応できなかった祓魔師は重傷を負った。
祐二は間一髪のところでかわした。
そして、昨日の霧が辺りを包む。
「みんな動くなだが構えておけ！」
甲斐卿の指示の前にみんな状況を把握して構えた。
「孤高の獣よ、その姿を現し、我の力となれ」
祐二は銀狼を呼び出し戦闘体勢になる。
銀狼はまた威嚇するように唸りだした。
霧が濃く辺りが見えないが霧の中を移動しているものがいることは感じることができた。
祐二は背後に何かを感じ剣を抜く。
すると何かが当たる感触がした。
「深く立ち込める霧は晴れ、主は導かん！」
祐二は暗唱するとだんだん霧が晴れ、一匹の悪魔が姿を見せる。

「まさか霧天狗！？」

「甲斐卿知っているのですか？」

悪魔は霧天狗といい主に守り神と崇められることが多く、知性が高く狂暴な悪魔ではないらしい。

「霧天狗なぜあなたがこのようなことをするのです？」

「黙れ、我が山を荒し、その上、山を血で汚そうとする人間共め！」

祐二は霧天狗の言ったことに疑問を抱く。

（霧天狗は人を殺っていないのか？）

「祐二君危ない！」

祐二はまた間一髪のところで霧天狗の風と羽をかわした。

霧天狗は自分の霧を払った祐二を一番の危険対象として狙った。

霧天狗は葉の団扇で祐二に斬りかかる。

祐二の剣と霧天狗の団扇が交わる音が辺りに響く。

竜騎士の祓魔師達は銃口を霧天狗に向ける。

「撃つな！天童に当たる！」

甲斐卿は祐二に弾が当たらないように発砲を止めた。

祐二は銀狼と共に霧天狗と互角と闘いを繰り広げていた。

いや霧天狗は祐二を殺そうとしていなかった。

（霧天狗から殺気を感じないのは気のせいか？）

甲斐卿は祐二と同じ事を感じていた。

甲斐卿はあることに気がつく。

（あの傷はもしや！）

気がつくのが遅かった。祓魔師の一人が倒れた。

みんなその音の方を向く。

「なんだあの悪魔は？」

「ブラックベアー、熊に憑依し出会った生き物を殺す悪魔だ！奴が二人の祓魔師を殺ったに違いない！」

竜騎士の祓魔師は銃口を悪魔に向け発砲するが金属のような固い皮膚が銃弾を弾く。

祐二が悪魔の方に行こうと霧天狗が立ちふさがる。

「どこに行く！」

「そこをどけ！仲間を助けに行くに決まっているだろ！」

だが霧天狗は尚立ちふさがる。

「彼は私と何百年もこの山を守っている仲間だ！殺しはしない。」

「だがあいつは人を殺したんだぞ！」

その言葉は届かず霧天狗は向かってくる。

「ならおとなしくしてもらおう。」

祐二は地面に刺さっている霧天狗の羽で指を切り、その指から出た血をもう1枚の紙につける。

「古より我らに仕えし者　我の求めを聞き入れたまえ」

すると祐二の足元に黒い獣が現れた。

霧天狗は祐二の獣を見て後退りをした。本能があいつは危険だと教えたのだろう。

（ほう、霧天狗を退かせるとはたいしたものだ！）

「甲斐卿危ない！」

甲斐卿は悪魔の存在を無視していた。

「候補生が一人で頑張っているだ我々も頑張るぞ！」

普通なら祐二に応援を行かせるべきだが祐二と霧天狗の闘いは誰も入れず逆に邪魔になってしまう。だから甲斐卿は応援を行かせないのだ。

祓魔師が放った銃弾が悪魔の鼻に直撃する。

悪魔はうめき声を上げて銃弾を放った祓魔師を一撃で仕留めた。

「何をしているんだ！」

霧天狗は突然のことに声を上げた。

「あれがあいつの本性だ！」

霧天狗は3対1でも互角だった。まだまだ余裕と言ったところである。

その後も悪魔は次々と祓魔師を襲っていく。おまけに血の匂いが悪魔をより狂暴化させている。

悪魔は祓魔師に襲いかかろうとすると祐二の使い魔が噛みつく。

だが祐二は霧天狗と闘かっていた。

甲斐卿は候補生に仲間を助けられた自分たちが情けなく思った。

「一斉に急所である鼻を狙え！」

祓魔師達は一斉に鼻に銃弾を浴びせた。怯んだところを祐二の使い魔がとどめを刺した。

「ふん！おいしいところを持って行きやがって！」

霧天狗は悪魔が倒されると闘いを止めた。

「すまなかった人間達。私の思い違いで仲間を死なせてしまって。」

「いいえ、私達人間が山を荒したのが悪いのですから。」

そして、なんとか和解することができた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3835x/

祓魔師

2011年11月17日17時03分発行